蒲田地区優秀作文

フィリピンでの暮らしが教えてくれたこと

大田区立蓮沼中学校　三年　佐々木　優吾

エアコンの効いた快適な環境でたくさんの本を楽しめる図書館。街のいたる所にあり、子どもたちが安心して遊べる公園。ガードレールや歩道が整備され、安全に歩ける道路。我々がいつも当たり前に利用しているこのような施設や場所は、何によって作られているのだろうか。その答えは税金である。今回、税の使い道について調べてみて、私は初めて我々の暮らしの基盤が税によって支えられていることに気がついた。

我々の税金は日本だけでなく、途上国の人々の暮らしも支えている。日本の経済や産業の発展がまだ進んでいない国々にさまざまな経済協力を行い、自立を支援しているからだ。この活動は「政府開発援助（ＯＤＡ）」と呼ばれ、我々の税金が使われている。

そこで思い出したのが、フィリピンのことだ。私は３歳から６歳までフィリピンのセブ島に住んでいた。４歳の時、セブ島で大きな地震が起きた。フィリピンではめったに地震が起きないため、街中が大パニックになったことを幼いながらもよく覚えている。これは後に両親から聞いた話だが、その時、多くの現地の人々がセブ島とその隣にあるマクタン島をつなぐ大きな橋に避難したというのだ。なぜなら、その橋は日本のＯＤＡによって建設されたものだからだ。セブの人々は、地震から身を守る一番安全な場所として日本が造った橋を選んだのだ。我々の納めた税金は、我々の知らないところでも、人々の安心安全な暮らしに貢献しているのだ。

思い返してみると、私が住んでいた頃のセブ島には、記憶にある限り公営の公園や図書館、美術館は数えるほどしかなく、日本のように気軽に利用できるような場所ではなかったように思う。道路もあまり整備されておらず、常にどこかに穴が空いていて、いつもどこかで道路工事が行われていた。信号も歩道もほとんどないので、歩行者は車やバイクを避けながらダッシュで道を渡るしかなかった。電車などの公共交通機関もなく、移動はいつもタクシーかジープニーという民間の乗り合いバスだった。

調べてみると、フィリピンは経済的規模に比べて税収が少なく、常に財政難という問題を抱えていることが分かった。つまり、国や自治体には道路や公共施設、公共交通機関を整備する余裕がなく、日本のように至れり尽くせりの公共サービスを提供することができないのだ。

今のフィリピンは経済も成長し、状況は変わっていると思う。一方、私が大人になる頃の日本は、少子高齢化が今より進み、納税する人は減ってしまうと予想される。そうなれば、税収が減り、今の豊かな日本の暮らしが維持できなくなる可能性もある。中学生の私にできることは限られているが、日本の将来を支える税について深く学び、納税の大切さを理解し、伝えていくことが重要だと思う。